

1. はじめに

島根県高校総体が5月末から6月上旬にかけて行われました。

各部活動のみなさんお疲れ様でした。今年度の浜田水産高校の総体の成績はBグループ(小規模校)で4位でした。弓道部の個人戦では優勝し、インターハイに出場する快挙がありました。その一方で負けてしまい良い結果が残せなかった人も多かったと思います。自分の力を試合で出し切ることができたでしょうか。

3年生は部活動引退になります。3年間で感じたことや最後の大会は人生の中でも貴重な思い出になると思います。

また、1, 2年生は先輩たちが築いてきた部活を受け継ぎながら、新たな風を起こしてほしいと思います。

2. 「よりよく生きるために」

地歴・公民科 佐々利 毅

毎日の暮らしのなかで、つくづく思うことがあります。それは、

「人間は、一人だけでは生きていくことができない」

ということです。例えば、学校で勉強したり、職場で仕事をしたり、お店で買い物をしたり、…。人間は、日常生活の色々な場面で、他人との関係のなかで生きていますね。

この「人権・同和教育部たより」第1号のなかで校長先生が述べておられましたが、自然界の生物のように、私たち人間の社会も、「共生」(きょうせい)という視点がとても大切だなあと感じます。人間社会には色々な人がいますよね。優しい人・厳しい人・意見が合う人・合わない人、……。色々な人間関係のなかで、それでも何とか現実と向き合って暮らしていくためには、ちょっとだけ「共生」を意識してみましよう。

「人権」と聞くと、なんだか難しそうなイメー

ジがあります。しかし、その根本は、人間がより良く生きるために、ということがあると思います。

それならば、より良くみんなが暮らせるためには、どんな態度・ものの言い方・考え方が大事なんでしょうか、と考えてみましょう。

3. LHR (ロング・ホーム・ルーム) 報告

浜田水産高校では原則各学期に一回、「人権・同和教育」をテーマとしたLHRを展開しています。今日は本年度第1回目の取り組みを紹介しましょう。

2年生【6月16日】

テーマは「人権感覚を磨く」でした。視聴覚教材を利用しながら、人権問題と部落差別の実態について学びました。今ある差別の実態から、いじめや偏見等の差別の芽がどのように生まれてくるのかを知り、クラスや集団の中に差別のない生活が送れるようにすることを考える時間でした。

授業後の感想の一部です。

- ・自分の立場を考えて行動することや普段の会話、行動をすべて正しくすることはなかなかできないですが、それなりの努力をしたいと思います。
- ・思いやりのある行動をしたい。
- ・自分が差別をしない。
- ・差別される人がいるということと、その人たちの気持ちを知ることが大事だと思います。
- ・同和問題そのものについて、自分で詳しく知っていくことが大切だと感じました。

他の学年については、今後のお便りにのせようと思います。



(裏へつづく)

4. 驚き、感心したこと

今月はワールドカップ（サッカー）で世界中が盛り上がっています。わたしもサッカーが大好きなので、今月は朝早く起きてTVを見ています。

ワールドカップやオリンピックをみるとスポーツの力、魅力はすごいなと感じます。日本中を熱くさせ、このときだけはみんなが一体となって応援をします。

残念ながら日本代表は負けてしまいました。敗退後の選手の姿から、自分たちがやろうとしていたサッカーができなかった悔しさが伝わってきました。今回やろうとしていた攻撃、パスサッカーを残しながら、進化してほしいと個人的に感じています。



さて、ワールドカップに出場している1人のサッカー選手を紹介します。その選手は「ダニエウ・アウベス」です。ダニエウ・アウベス（以降、D・アウベス）はブラジル代表(右サイドのDF)で、普段はバルセロナのチームに所属しています。彼のある行動が5月に世界中で注目されました。

試合中に、D・アウベスがコーナーキックを蹴りにコーナーに歩いて行ったときに、観客席から彼に向かってバナナが投げ込まれました。

（これは、アフリカ系やアジア系に対する白人の差別行為で、猿の好物であるバナナを差し出したり、猿のまねをすることもあります。）

バナナを投げられたら、普通は怒ったり、無視するところですが、彼はそのときに人種差別が込められたバナナを食べたのです！ その行動をみた観客は彼に賞賛の拍手が起こりました。

後日、他の選手たちもバナナを食べて、「おれたちはみんなサル・みんな同じ」のメッセージを発信し、人種差別に対するスローガンにまで昇華されました。

私はこの記事を読んだときに、観客の行為(人種差別や食べ物を粗末に扱う行為)に悲しくなりましたが、D・アウベス選手のすごさ、人間の大きさを感じました。

差別は人と人とのつながりを断ち切る行為です。しかし彼は「差別の意味が込められたバナナを食べてしまう」というユーモアで、観客や他の選手に驚きを与えました。そして、人とのつながりを断ち切るどころか、逆に人種差別に反対するたくさんの人とのつながりを新しく作ったのです。

日常生活の中で、他人から嫌な気分させられることはあると思いますが、そこでつながりを断ち切るのではなく、何か違った行動でつながりを作れるのでは…と感じました。

後日インタビューで彼はこう述べてます。

「【俺たちはみんなサル】という言葉はあまり好きではない。人間はサルから進化した。僕たちはみんな人間で、みんな同じなんだ。守らなければいけないのは、そのことなんだよ。僕たちは21世紀に生きており、人間はこのような面で進化を遂げなくてはならない。人間同士敬意を持たなくてはね。僕たちはみんな同じなんだ。」



(文責 宮内洋介)